

国軍人すべての人の熱い願いであると思います。

海軍特別陸戦隊―海南島―

台湾出身志願兵との絆

石川 泉 健 一

私は小学生のころは中国の上海に住んでおり、海軍陸戦隊のラッパや鐘の音を聞いて暮らしていた。上海事変の時には白い軍装で銃剣を持った水兵さんに学校まで送り迎えをもらったので、日本の軍隊は陸戦隊であると思っていた。陸軍を知ったのは、親の故郷の金沢へ来て第九師団を見てからだ。

昭和十八年十月二日、大学・高等専門学校学生の徴兵延期が廃止になり、理工科系学生以外の文科系学生は十二月に陸海軍に入らなければならなくなる。これが、現在もニュース映画や写真に残る、いわゆる学徒出陣である。

私は、十二月十日舞鶴海兵団に入団するように通知

を受けていた。残された二カ月間、前途を思ったり、何をどうすればよいのか全く手がつかない毎日だった。

十月二十一日、出陣学徒の壮行会が明治神宮外苑で行われた。学校の校庭でも在校生徒諸氏の壮行会が行われ、学生服に巻脚絆、帯剣を腰に締め、小銃を持って代々木の会場に向かった。小雨が降り出し黙々と列が進み、服は濡れて薄寒かった日である。

やがて入口にさしかかると拍手の嵐であった。ハッと我れに返り見上げると神宮外苑のスタンドは拍手をする女学生で埋まり、髪から雨の雫が落ちて黒髪が光って見えた。分列行進が「抜刀隊」の行進曲に合わせて前進し、水溜まりも何のその、足が自然に高く上がり、泥のはねが背中の上までいっぱいになり我を忘れて進んだ。

東條首相、文部大臣、陸・海軍大臣の激励の言葉、残る学生代表の送る言葉に、出陣学徒が答辞を述べ、「天皇陛下万歳」を三唱し解散した。

文部省主催で挙行した学徒出陣壮行会には、東京局

辺七十七校が参加した。出陣学徒兵の数は、全国で十万人余り。そして、この中の多くの学生が、陸に海に空に行つて還らぬ人となつたのである。

平成五年に「出陣学徒壮行の地」と刻まれた記念碑が国立競技場の一隅（千駄ヶ谷門内のマラソンゲート脇）に建てられた。

十一月にもなると、母が上海から陸路数十回も乗り換え、朝鮮經由で私の所へ来てくれた。母の愛は強いものと、感激でいっぱいであった。学生服に名前が書かれた日の丸の旗を纏まとがけにして、私は母と共に親類へ挨拶、靖国神社、明治神宮等を参拝した。

神社の境内や街にも多くの学生が歩いてゐた。皆の気持ちには私の気持ちと一緒であつたらう。映画館では「無法松の一生」が上映されており、私は母と見る最後の映画になるかもしれないと思ひながらこの映画を見た。無法松のひく「人力車の車輪の回転」が静かに止まる印象的なこの映画を忘れることが出来なかつた。これが、母子二人の最後なのかと思ふ時、母の心

の辛さを思いながらの一時であつた。

十一月中旬から帰京の学生の送別のため、上野、東京、新宿の駅前の広場は、毎日学生の波また波であつた。また校歌・応援歌グループが多く出来、私もその中に入つて「頑張つてくるぞ」「後を頼むぞ」の言葉を交わして別れたのである。

十二月九日午後五時過ぎ、臨時列車が松任駅に着いた。この列車は、舞鶴海兵団へ入団する出陣兵の臨時列車であり、長野発各駅停車で東舞鶴へ向かう。「防謀のため静かにお見送りください」との駅員の声もいつしか「万歳」の声に変わり、私は列車の中へ入つた。

学生服に日の丸・奉公袋と同じ姿ではあるが、皆初対面である。学校も違うから各停車駅から乗り込んで来る。この人達と一緒に兵隊になるのかと思つと、少し不安になつた。通過する駅を無言のまま外を見つめてゐると、暗闇の中に電灯の光が走る。不安とやりきれない気持ちでいっぱい、というのが私の偽らざる心境であつた。

やがて列車は東舞鶴駅に着いたが、まだ薄暗い。明けて十二月十日である。駅から、下士官に引率される。四列縦隊の長い列である。足音だけがザックザックと続く静かな行進であった。海兵団の門をくぐり練兵場に整列。三階建ての黒い兵舎が夜明けとともに眼前に浮かんでくる。異様な圧力と緊張を感じた。

これから三カ月余り、娑婆（一般社会）より兵隊になる猛烈訓練が始まった。吊床（ハンモック）訓練、短艇（カッター）訓練等忘れることの出来ない特訓である。時々、「何のためにするのか？」とも思ったが無我夢中であった。終了後、武山海兵団を経て、鬼と言われた千葉原館山海軍砲術学校での陸戦科の特訓。まさに鬼の館山の血の出るような実科訓練を受けたのである。我々は訓練期間が終わると同時に各前線の陸上、艦船に配属された。

私の赴任した現地は、上海特別陸戦隊―海南島であった。私の希望は少年時代過ごした上海、上海特別陸戦隊で、その希望がかなえられたのは幸せであった。

神戸港より瀬戸内海を通り、大型輸送船に予科練の

兵隊とともに玄界灘へ出る。直ちに対空・対潜の警戒体制に入り、朝鮮半島を右に見て海岸に沿って（潜水艦を避けて）第二の故郷上海に着く。

上海特別陸戦隊より家への連絡は、家の隣家の田尻陸戦隊付剣道師範より伝えられた。家族の驚きと喜びは「お兄ちゃんが帰って来たよ」だった。まさか、上海へ来るとは夢にも思わず大騒ぎだったそうである。毎日、母の手料理で歓迎。海軍の話をするのが楽しみであったし、海軍に入って良かったなあとつくづく感じた。

司令部中隊より呉崧砲台の近くのボ東砲台に変わった。この砲台は、上海空襲で砲台員全員が戦死した。母の引揚げ後の話では「上海にいたらあんたも戦死だったよ」とのことで、これも運命であったと、今も砲台員の冥福を祈っている。

ボ東砲台勤務から一カ月余り過ぎた日、突然「海南島へ補充兵員五〇人と、機関銃四〇挺と共に上海派遣隊として直行すべし」の命令を受けた。駆逐艦「蓮」に便乗して海南島へ行く。家族には行先は秘密、「現

地に着いてから連絡する」と言う顔色が変わった。せつかく上海に着いたのという父母の心は判るが、「絶対に言わぬから言ってくれ」と言われても、こればかりは言えない。軍の秘密である。

舟山列島を通過して台湾馬公着、軍票を積み香港着、海が美しく箱庭のようである。香港を出港した艦船は必ず空襲を受けるとのスパイの連絡があり、特別警戒に入る。水中探知器が潜水艦をキャッチ、爆音が聴こえる。空と水中との戦闘配置、艦が左右に蛇行するのがスクリーンの回転によって夜光虫が白く光り、白い線を描いている。至近弾を二発受けたため全艦水びたしとなった。

夜明けと共に椰子の茂る海南島三亜港の榆林港に着いた。やれやれとホッとす。七七ミリの機銃と兵員を各司令部へ配置、戦力増強となる。海南島は海岸線を確保し三亜飛行場、航空隊特攻基地、人間魚雷基地などがあったので、毎日、ロッキードP 38、B 29、グラマン、カーチス戦闘機の攻撃を受けた。

十日に一度連絡に来ていた川西式飛行艇も来なくな

り、制空権もなくなったと感じた。友軍機は空中退避するし、十二・七センチ高角砲も一万メートルの上空では届かない。そのため敵機は悠々と通過して行くが、残念ながらどうにもならない。海南島への攻撃は日に日に激しくなり、我々も銃爆撃の被害を受け緊迫した状況になってきた。

しかし、兵員の補充が困難になったので「現地の台湾出身の民間人、軍属の中から志願兵を募集し、特訓して兵力を増強すべし」との通達により、試験の結果、優秀な者を海南島五カ所にて約九〇〇人余りを集め新兵教育を行うことになった。

私は、第十六警備隊中之島訓練所付を命ぜられ、一般内務、陸戦は同じであるが、カッター、吊床の訓練がなく、ジャングル戦、機関銃、挺進切り込みの実戦で間に合う訓練をした。私の担当は普通学科、数学、国語と陸戦であったが、教科書が無いので困った。昔を思い出して植木算、鶴亀算、平方根、ピタゴラスの定理等々、自分自身もわからない学科も教えるければならない。これならもっと勉強しておけばよか

ったとつくづく考えた。

教育期間中は、外食、外からの差し入れ厳禁。新兵は皆空腹である。そこで陸戦訓練中に部落の近くで小休止して、三十分休憩する。その間に原住民の駄菓子屋と食堂で息入ると皆頑張る。訓練中食べたビーフン（米の粉で作った麺類）の味は忘れられない。

彼等は日本兵だから、台湾語は絶対に喋ってはいけない。名前も全員日本名に改名している。どこから見ても日本軍人である。高砂族出身もいたが、広東省出身者と福建省出身者とが分かれて争いが絶えぬのにも困った。

教育終了後、十八歳から二十一歳までの若い兵士は、各部隊、各砲台、派遣隊の兵力の増強になり、日本兵の年輩の補充兵とは比較にならぬほど重宝がられ喜ばれた。台湾出身者は真面目に訓練を受け、大部分が軍人として立派に任務を遂行してくれた。

私は四十余人の志願兵と共に、海岸線防衛と治安維持の任務に就き、毎日戦車壕と防空、対上陸軍防衛のためのタコ壺を掘り、トーチカ、要塞の建設に従事

した。ここが死に場所になると頑張り、皆と「運命を共にしよう」と語り合った。

Y作戦の信号があり、「敵機動部隊・艦船が南シナ海を遊弋中、直ちに戦闘配置に就け」という命令である。全員武装し、食料として「おむすび」が配給され、敵の上陸を防ぐため死に場所へ行った。

トーチカの中で眠れぬ夜が明けた頃「敵機動部隊は北上しつつ沖繩上陸す」との報で、Y作戦は中止となり、命が延びた。またゲリラ掃討のジャングルの討伐にも出動することが度々あった。日本は連合軍に包囲され、各地の戦線がだんだんに厳しくなってきた状況も無線などで知るようになった。

いつ、米軍が上陸してくるかも知れないので、対空砲を垂平砲（砲台）に変えて海岸線の防備を強化した。そのため毎日毎日、土木工事にも汗を流した。とにかく、ここが自分の墓場になるのだと思って一生懸命に全員力を入れていた。将校も下士官も兵隊も、そして台湾の志願兵も一致して、空腹にも耐えながら努

力をしていた。

その間、インドのデリー放送（短波）を傍受し、南方の島々も撤退（転進）作戦をしていることを知った。そして「広島、長崎に新型爆弾が炸裂（原子爆弾）、被害が甚大」という。デマだ、日本は不滅だ、必ず勝つと信じていたが、終戦を迎えることになった。

「八月十五日、重大放送あり。本部に集合」との連絡があった。服装を正して整列する。ラジオは雑音がガーガーとして聞き取れない。戦いが終わったようでもあり、また、励ましの御言葉のようでもある。誰言うとなく「負けた。戦争は終わった」と肩を落としすすり泣きが聞こえる。皆虚脱状態である。「デマだ」一瞬静かになり、またざわめく……。

デリー放送が、盛んに「日本全面降伏、ポツダム条約受諾」を伝えているが、我々は信じられなかった。原住民も騒いでいるようであった。その時、私は台湾の志願兵に何と伝えればよいのか、彼等は日本を信じ

ていたからである。自分が初年兵教育をし、「ここが死に場所だ、運命を共にしよう」と語り論したのだからである。私は彼等に「本日戦争が終わった。終戦である。それぞれ故郷へ帰って復興再建のため若いエネルギーで頑張ってほしい。諸君の健闘を祈る」それだけの言葉がやっとであった。

我々は田独鉞山の捕虜收容所に集中（集中営）、台湾の志願兵は中国軍第十九師団に引き渡した。その後、如何になったか不明であり、逆賊、漢奸として処刑されるかもしれないとも考え、泣きながら「日本へ連れて行ってください」と、嘆願する者が続出した。何とか納得はさせたが、その後の状況は不明である。

私達は、武装解除され、毎日山林の伐採と道路の整備の重労働。配給食料も少なくなる。栄養失調者も出る。いつまでここにいるのか不安である。戦犯容疑者の首実験が行われ、二人連れ去られていった。次の番は誰であろうか、そんな不安な日も続いた。

昭和二十一年四月に入り、米軍の輸送船リバティ

型が入港した。「引揚船らしい。日本へ帰れるぞ」と皆の顔に明るさが蘇る。港で最後の首実験が行われた。現地人、中国軍、米軍の将校に顔を凝視されて帰らぬ者も出た。情けない敗戦の姿であった。船員は「リンゴの歌」を歌い、内地の状況を聞く。味噌汁と、たくあんが、何と美味であったか忘れられない。

ああ、これでやっと日本へ帰れる。上海にいる家族はどうなっているのか？ その後三カ月して全員無事引揚げ、再会、戦後生活が始まった。

毎日、家族会議、闇屋、ブローカー、買い出し、引揚者と復員者の家族の日本での生活は、当分の間は生きていくのに精いっぱい……。

昭和五十五年十月、台湾から手紙。「覚えていますか私達」という書き出しで「学友会（戦友会）を致しますから、是非参加してください。皆が待っています」と、忘れていた志願兵からの便りであった。驚きと懐かしさで胸が高鳴り、地方新聞にも「三十六年ぶりの再会」として掲載された。

私達関係者（当時の湯浅大尉、古屋中尉等関係者十

人）と感動の再会。懐かしい青天白日旗の並んだ桃園空港へ。会場で再会の涙涙で、皆と抱き合う。よくぞ生きていたと、別れてからの苦労話、申し訳ないと謝るだけであった。

彼等は、中国軍から解放され、民間人として故障した船を修理、十二日間かかって海南島より台湾に帰り、再建のため頑張ったと、胸を張って言っていた。大和魂で頑張ったと。それ以後、毎年十一月に慶生会を開くことに決定し、今年でもう二〇回にもなる。参加者も毎年少なくなっていくが、まだ七十人参加。日本からは、昨年は私一人になった。「最後の一兵まで来てください」と彼等は言う。私も命ある限り出席する覚悟である。

生死を共にした友情は永遠であると信じる。日本へ来れば、必ず靖国神社と護国神社に参拝する。今まで私の家にも五人余り訪れた。嬉しい来訪者である。私も台湾へ行くと、必ず台中市宝覺寺にある「靈安故郷」に参る。これは日本のために散華した台湾出身者

三万三千柱の慰霊碑だからである。私と台湾出身者とは、永遠の絆で結ばれている。残された人生を大切に生きていきたいと念願している今日である。

ボルネオ

第二十二特別根拠地隊

岐阜県 保木 松右衛門

農家の次男として、現在の岐阜県吉城郡国府町で生まれた私は、家を継ぐ立場になろうとは思っていませんでした。姉は既に嫁ぎ、兄は軍隊に入っているが、帰って来れば家業の農業に従事するだろうと、半ば安心した次男坊でいたのです。

大正十年六月五日生まれでしたから、昭和十六年徴集で兵隊検査を受け、第二乙種、第一補充兵となり、歩兵の八番ということであります。そのため、軍隊へすぐ行くことは無いと思い、昭和十七年に神奈川県にある相模原陸軍航空支廠に入所、八カ月間勤務をし

ているうち召集令状が来ました。陸軍かと思っていたところ、昭和十八年九月海軍へ召集というので、ちょっと驚いてしまいました。しかも呉海兵団入団となりました。

呉で改めて検査を受け、甲種ということになり、徳島航空隊へ転属、三カ月の新兵生活を送ったのです。海軍の新兵の教育は誰でも知るように極めて厳しいものでした。そうしなければ誇りある帝国海軍の水兵にはなれぬからでしょう。バットで尻のアザが消えることはなく、海軍軍人としての基礎を徹底的に仕込まれた三カ月でした。

次は航空隊から自動車学校での教育が二カ月間あり、運転技術を身につけ、一等水兵となり、元の呉海兵団へ戻りました。しかし、海兵団にいたのは二十日間、南方へ勤務、転属となり、「讃岐丸」という輸送船に乗船しましたが、もう昭和十九年となり、制空・制海権は既に連合軍の手中にあり、敵の潜水艦は南方各海峡に出没し、船の航行は危険極まりないものになってしまっていました。我々兵隊には細かいことは判